あなたの初めは小さくあっても
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
（ヨブ記 8:7）

純福音東京教会・出版部
〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

9
2017

Full Gospel Tokyo Church

CONTENTS

■ 2　雨上がり後の眩しい日差し …… イ・ヨンフン牧師

■ 4　ヨンサンコラム …… チョウ・ヨンギ牧師

・平和をもたらす者

■ 6　メッセージ ……志垣重政牧師

・悔い改めよ、天国は近づいた

■ 9　信仰の明文化を成し遂げますように⑱…… イ・ヨンフン牧師

・信仰を最初に受け入れた約束の地

■ 14　主と歩く…… ヘンリー・グルーバー牧師

・基が取りこわされるならば、正しい者は何をなし得ようか

■ 19　我が人生のプラス……

・この地を愛せば、天から食物が与えられる

・世界で一番美しいお母さん

■ 29　牧会の香り…… ハン・キチェ牧師

・献金は恐れのない信頼

■ 33　これが知りたい……シン・ソンジョン牧師

・使徒信条は聖書にはないが、なせすべての信徒が告白するのか？
　また使徒信条を告白しなければ異端なのか？

■ 35　世の終わりの日まで……ソン・ヒョンギョン牧師

・ルターがカトリックに対抗したもう一つのもの、エロス

■ 40　統一時代を開く……ベン・トレイ牧師

・この世と妥協してはならない（7 月号より）

・信仰の通り仕えること

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 8 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。
ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

雨上がり後の眩しい日差し

イ・ヨンフン牧師

スウェーデンの有名な説教者であるボーベリー牧師。ある日、森の中を散歩していたら雷が鳴り、にわか雨が降り始めました。しかし、すぐにその雨はやみ、眩しい日差しが森の中に広がりました。澄み渡る青空には鳥が飛び立ち、さえずります。小川も静かに流れます。そこで彼は、宇宙に満ちた神の力について、そして自然に満ちた神の摂理について書き留めるため、一本のペンを取りました。

「輝く日を仰ぐとき、月星眺むるとき……」

今日、世界中のクリスチャンが最も愛唱する賛美歌の一つである、「輝く日を仰ぐとき」は、このようにして誕生したのです。自然の前で創造主の偉大なる摂理に私たちは皆、畏敬の念を抱き、賛美するようになります。草一本、小さな石ころ一つさえも、主の偉大なる摂理があります。静かに流れる小川の前で、ボーベリー牧師は、このような考えをしていたのではないでしょうか。

「小川は石ころがあるとき歌う。」

高い丘に登る、または山の頂に登ると、下にある物や人は非常に小さく見えます。あれほどに心配していたことや憎んでいた人が見えなくなります。ただ開けた視野に、美しい風景だけがあるだけです。主の偉大なる摂理の前ですべて忘れることができます。

自然に多く接する季節です。「輝く日を仰ぐとき」を賛美しながら、神がどのような祝福の世界を備えておられるだろうか、と思いを馳せながら喜びしょう。†

ヨンサンコラム

単一教会として世界最大規模であるヨイド純福音教会の元老牧師として仕えている。筆者は、美しい社会作りへの参加と、真の福祉社会のために、キリスト教精神を基にして設立された「ヨンサン・チョウ・ヨンギ慈善財団」の理事長として、第二の働きを繰り広げています。

この世の中で一番立派な人は、平和をもたらす人です。なぜならば、その人はイエス様の御働きを受け継いで実践しているからです。イエス様がこの世に来られた目的は、神様と人間を和解させるためでした。イエス様の十字架は和解、平和の象徴です。イエス様の死は、和解の証拠なのです。この事実は、聖書にはっきりと記されています。

「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。」（ローマ 3:15）
「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。」（ローマ 5:1）

このように、イエス様は神様の御子として、私たちのために和解のためのいけにえとなられました。ですから、平和をもたらす者もまた、神の子と呼ぶことができます。神の御子、イエス・キリストの御働きに携わっているからです。

私たちは、地位やお金や物質では平和を得ることができません。私たちに平和をもたらすことができるのは、ただイエス様の血潮のみです。ですから、私たちがまず神様の御前で、神様と私と和解し、さらに自分自身とも和解して、家族や隣人とも和解し、平和を得なければなりません。今日、このような平和をもたらす人は、イエス・キリストの十字架とその教えを伝える人です。

私たちが平和の福音を伝えるためには、何よりもキリストの愛を所有しなければなりません。そして、長く忍耐して、柔和で謙遜でいなければなりません。私自身がまず死ななければ、和解をなすことができません。自分の自我を殺し謙遜に低くなるためには、キリストの愛が不可欠です。イエス様は神様と私たちを和解させるために、死の杯を飲まなくてはならなかったように、私たちも和解によって義の実を結ぶためには、日々、私たちの自己中心的な考え、高慢と肉の情欲を殺さなければなりません。

今日一日、それぞれの生活の中で平和をもたらす者になり、神の子と呼ばわれるような行いがなされることをお祈りします。†

純福音東京教会 志垣重政 牧師

悔い改めよ、天国は近づいた

── マタイによる福音書 4 章 17 節 ──

この時からイエスは教(おしえ)を宣べ伝え始めて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた。」

このメッセージを宣べられた時、多くのユダヤ人がイエス様のところへ集まって来ました。ダビデ王国の再建、ローマの圧政から解放してくれるメシアを、首を長くして待ち望んでいたからです。ローマの総督ピラトも、革命暴動を起こすのではないかと憂慮し、強い関心を寄せていました。しかし、イエス様の目的は、政治や経済ではなく、聖なる神の国を建てるための霊的福音の伝播にありました。人々に、この世の光、地の塩としての役割を果たさせるための個人改革運動でした。「また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」（ルカ 17：21）。結局、ユダヤ人たちはイエス様を裏切り、『十字架に架けよ』と叫び、ピラトは群衆蜂起を怖れ、これを許しましたが、2000 年が経った今でも、天国の領域は聖霊様によって私たちの内に広がっています。天国が近づいているからです。

第一に、天国は私たちの内に悔い改めの運動を起こさせます。悔い改めとは、心と考えを改め、その進路を 180 度転換することを表します。霊が死に、天国への窓が閉ざされていた人類は、物質と環境以外に興味を示すことがなく、どこから来て、何のために生き、どこに行くのか知らずに生きて来ましたが、イエス様を受け入れ、悔い改めることによって、天国への窓が開き、神の国に向かって進路を変えることができるようになりました。神の国の民となり、神の子どもとなることができるのです。イエス・キリストを信じる者は、肉の世界と同時に霊の世界にも属することになります。新しい被造物になったからです。霊に属する者は、愛・喜び・平和・寛容・慈愛・善意・忠実・柔和・自制の九つの聖霊の実を結ぶことができます。その実のなるところが天国なのです。

第二に、天国は私たちに癒しの力を与えてくれます。福音が宣べ伝えられるところには、いつも癒しがありました。癒しは、らい病・足なえ・中風など、肉的障害を取り除きます。サマリヤのスカルという町で、サマリヤの女を救われたように、心的障害を取り除きます。姦淫の現場で捕えられた女が赦されたように、霊的障害を取り除いてくれます。「私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マタイ 9:3）。また、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」（マタイ 9:

12)。――『天国が近づいた』という福音とともに癒しがありました。12 人の弟子たちが福音を宣べ伝えた時も、70 人の弟子たちが御言葉を宣べ伝えた時も、癒しが起きました。神の国は癒しが根本であり、天国には癒しの川が流れ、その癒しが聖霊様を通して流れて来るからです。

第三に、天国はアブラハムの祝福を具現してくれます。私たちがこの世で暮らす限り、茨とアザミが生い茂り、その棘により傷き、血を流します。この世は悪魔の支配にあり、呪いに満ちているからです。しかし、天国の祝福の力で、その呪いを克服することができます。天国には呪いが存在しないからです。ここに、イエス・キリストの十字架の贖いの意味があります。イエス様を受け入れた者は天国に住む者ですから、呪いを暮らしの中から取り除かなければなりません。天国の臨在が、それを可能にします。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ 8：32)。天国には呪いからの解放が伴います。

第四に、天国は鍛錬の道を開いてくれます。金銀を精錬する時に、何度も炎によって不純物を除去していくように、練達により私たちの中の人本主義のカスに至るまで除去し、考え方・言動・行動・人格を変えてくれます。鍛錬は、天国への道であり、聖霊様の導きと支配によってのみ、成就することができます。聖霊充満とは、『天国充満』を表します。この天国を宣べ伝えなければなりません。天国の霊を受け入れ、天国の偉大な力が、聖徒の皆さんの暮らしの中に豊かに臨まれますよう、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。†

シンガーミシンを販売してお金を稼いだ

キム・ミョンソンとはどのような人物か。セブランス病院初代院長だ。彼はアメリカで医学を勉強し、祖国に戻り韓国の医学発展に輝かしい功績を挙げた。一瞬の選択が一人の人生を完全に変える。セブランス病院院長であるキム・ミョンソンという名前は今も多くの人々の口から「素晴らしい医者のモデル」とされている。ヨンヒ専門学校とセブランス連合医学専門学校を合併し、延世大学校とした功労者でもある。

ある時、おじの長女に不思議な疾病が見られた。背中が曲がり突き出始めた。脊椎カリエス（結核）に罹ったのだ。一度背中が曲がると、それを運命だと感じ、一生そのように生きなければならないと考えた暗鬱なる時期だった。若い女の子には悲劇の人生であっただろう。祖父はその子を連れてキム・ミョンソン博士を訪れた。

「この子が私の孫だ。見た通り、背中が曲がり突き出していてとても心配だ。キム博士はアメリカで現代医学を学んできたからこの程度は治せるだろう？あなただけを信じるよ。孫を任せ

て行くから、必ずきれいに治してくれ。」

キム・ミョンソン博士はいとこを入院させ、手術を受けさせた。そして本当にきれいに治療したのだ。それ以上は背が伸びなかったが、タイミングを逃せば、その子は多分背中が曲がったまま涙の人生を生きていただろう。

9代目の本家であった祖父は「目が曇るまでは絶対にダメだ」と言った曾祖父母の言葉に従順し、アメリカ留学を諦め、日本からミシンを輸入、販売し、ピョンヤンミシン貿易商理事長を任され、ミシン業界を引っ張った。父も16歳から祖父について船で日本に来て、貿易に対して学んだ。そのミシンが「シンガーミシン」というものだ。国内では探すことのできないほど旋風を起こした人気の商品だった。祖父はピョンヤンで最も裕福な事業家として名を馳せた。

イエスを信じれば死すら美しい

高校2年のときだった。祖父イ・ウォングン長老が危篤だという連絡を受け、急いで家へ向かった。家族全員が祖父を中心に丸く座り、賛美を歌っていた。おじは祖父の手を握り、脈拍を確認した。少しずつ脈の振動が静まってきていた。その時私は、はっきりと見た。

「どうしたらそのように顔が明るくきれいなのだろう。顔から光が出ている。そうか、イエスを信じる人は死すらもあのように美しいものになるのだ。」

祖父はとても平安に静かな姿で賛美の車に乗り、天に召された。

しかし、葬式で祖父の膝がごつごつした厚い筋肉で覆われているのを見た。膝に力こぶのようにはまった筋肉の正体は何なのか。祖父はラクダの膝となっていた。長い歳月、堅い床で膝

を曲げ、祈ることで膝が硬い筋肉でかたまってしまったのだ。祖父は早天礼拝を欠かしたことが無い。生涯、祈りを積み上げた信仰の勇士だった。元々長老教だった祖父が純福音教会に移ったのも、早天祈祷のためだった。祖父は家から近いソデムン純福音教会に3ヶ月間、1日も休まずに出席した。その時チョー・ヨンギ牧師の御言葉とビジョンに大きな恵みを受け、家族全員をこの教会に登録させた。

「チョー・ヨンギ牧師はとても素晴らしい方だ。御言葉が生きていて聖霊に満ちた主の僕だ。私たちは生涯仕えるべき教会を見つけた。これから家族皆が近い純福音教会に登録し、ここで熱心に信仰生活をしよう。」

その日から、家族は純福音の熱心な信者となった。祖父の御言葉には権威が、そして威厳があった。誰もその言葉に意見する者はいなかった。

「私はイ・ウォングン長老を尊敬します」

ラクダは膝を曲げなければ主人に仕えることができない。ラクダの膝は謙遜の象徴だ。教会員たちが皆、ラクダの膝となれば、家庭が生き、教会が生き、国家が生きる。クリスチャンは、神様が世を統治されるため、ラクダのように謙遜に膝を曲げなければならない。チョ・ヒョンジュの「ラクダの膝」というCCMがある。

「熱い太陽が燃やす渇き / 一寸先も見えない砂の嵐 / 私の肩を押す重い荷 / 今日も私はこの道を歩く / 私が慕い求める私の主人のため / 曲げなければならなかった私の膝は / いつからか硬くなってしまった私のひざは / 感じることもできない肉となり / 私の唯一の誇り 私のらくだです / ただ祈り求めて生きて

行く私です / 私の高ぶる心と口が / 主に祈れなかったけれども / 今私は祈ります / 私の膝を曲げ父の名を呼びます / 天の門を開き応えてください / 私の力と能力 私は祈ります / 私の膝を曲げ父の名を呼びます / 天の門を開き応えてください / 私の力と能力 私は祈ります」

祖父の葬式はチョー・ヨンギ牧師が全てを担ってくださった。チョー牧師は入棺、発人、下棺礼拝までも導いてくださった。イ・ウォングン長老は元々長老教だった。長き間、長老教に仕えておられ、遅くに純福音教会に出席されたが、他の長老に負けないほど、忠誠と献身の手本を見せられた。その忠誠に対しての礼として、チョー・ヨンギ牧師が全ての日程を進めてくださった。

「私もイ・ウォングン長老をとても尊敬します。」

チョー・ヨンギ牧師は葬式場でイ・ウォングン長老に向けて尊敬の意を明かした。それほど多くの愛を施し、天に召された。

北朝鮮のために祈る

私は北朝鮮への宣教に関心が多い。なぜなら私が尊敬する祖父と両親は皆、ピョンヤンで福音を受け入れ、信仰の根を下ろしたからだ。キム・イルソン回顧録＜世紀に向けて＞という本がある。死去までに5冊執筆した。北朝鮮のすべての住民の必読書で、韓国では禁書だ。その本の第2巻を見ると、キム・イルソンの幼少期のストーリーが出てくる。

キム・イルソンは母カン・バンソクに付いていき、幼少期から教会に出席した。クリスマスになれば聖劇もみて、プレゼントも貰い成長した。しかし、いつも疲れながら仕事する母カン・バンソクは、主日説教の時間になれば居眠りすることが多かったようだ。その時キム・イルソンはこのように考えたという。

「私たちは日本と熾烈な戦いをしなければならない。しかし教会は続けて、愛を伝え、赦しを教える。このようなキリスト教は力がない。日本と戦って勝つ力を育てなければ。教会の教えではそのような力を持つことはできない。」

結局、キム・イルソンは教会を離れた。一を知り、二を知らない愚鈍な選択だった。福音の真理は手裏剣のように鋭い。キリストの兵士は恐れがない。キム・イルソンはなぜこの事実を知らなかったのだろうか。福音の威力をなぜ分からなかったのだろう。

キム・イルソンが教会を離れたもう一つの理由がある。六・二五戦争の時だった。人民軍はナクドン川まで進撃し、再びピョンヤンに後退した。その時、ハン・ギョンジク牧師をはじめとするキリスト教指導者たちが一斉に南側を支持するという出来事が起きた。キリスト教は根本的に共産主義を支持することはできない。共産主義は唯物論を基礎とするため、キリスト教の真理とは最初から平行線をたどるのみだ。牧師たちの態度を見てキム・イルソンはキリスト教を敵とみなした。そして教会に対して凄まじい迫害をした。

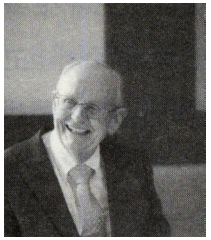
ビリー・グラハム牧師がピョンヤンを訪問した時だった。ビリー・グラハム牧師とキム・イルソン一行が晩餐をする席で食事の祈りを前に、キム・イルソンが周りを見渡して言った。

「同胞たち！牧師の祈りが終わったら、皆『アーメン』と言いなさい。」

キム・イルソンを神だと仕える主体思想を、キム・イルソンではなく「神様」に変えれば、一瞬で北朝鮮は福音の地に変わると信じる。だから北朝鮮のための祈りを止めることはできないのだ。また、その場所は私の信仰の先人たちが、信仰を初めて受け入れた約束の地だからだ。†

ヘンリー・グルーバー牧師の
主と歩く

基が取りこわされるならば、正しい者は何をなし得ようか



ヘンリー・グルーバー
（Henry Gruver）牧師

「世を歩くとりなし祈祷者」で知られた筆者は 18 歳の時からアメリカのアリジョーナ州フェニックスの犯罪多発地域で主と共に歩き始め、今も主と共に歩いている。彼は全世界のどんな場所でも、出会った人たちのために祈り、福音を伝えている。彼の人生には超自然的な不思議が多くあったが、より大事なことは、彼が主の御言葉に従順しながら歩き、祈っているという事実だ。

「基が取りこわされるならば、正しいものは何をなし得ようか。」（詩篇 11：3）

20 世紀に欧米で起きた最も大きな事件は、キリスト教の影響力が衰退したことである。4 世紀に皇帝コンスタンティヌスがキリスト教を公認して以来、ヨーロッパにおいてキリスト教は法と政治、文化の中心であった。およそ二千年の間、ヨーロッパとアメリカの道徳観は聖書の教えに基づくものであった。

20 世紀初頭、同性愛はヨーロッパでは収監の対象となる犯罪だった。1970 年代まで、北ヨーロッパにおいて婚前同棲や同性愛は希なことであった。ところが 1970 年から 2017 年までの 50

主は不義を喜ばれない。宇宙の統治者であられ、歴史の主管者であられるイエス・キリストの統治の笏は正義である。だからクリスチャンは、不義と悪の存在に対してとりなしの祈りと正しく良いわざと真理の宣言で立ち向かうべきである。クリスチャンが不義に対して沈黙、また同調するならば、その社会は審判を受けることとなるだろう。

年間に、性文化と家族についての概念、結婚の定義、男女の役割区分は息つく間もなく大きな変化を遂げたのである。

ローマでは同性愛が盛んであったと言われる。しかしそれは富裕層による性的快楽の形態であり、同性結婚を合法化し認めることはなかった。20 世紀以降、同性が結婚して家庭を作ることを合法的に認める性文化が現れたが、筆者の知る限り、そのような文化はそれ以前にはなかった。なぜ 20 世紀から 21 世紀にかけて、同性愛、性転換、同性結婚がこれほど急速に大きな社会的支持を受けるようになったのだろうか？　このような混乱はどこから始まったのだろうか？

科学技術による文明の発達がキリスト教を衰退させたと主張する人たちがいる。本当にそうだろうか？　昨今のアメリカとヨーロッパ、アジアでは、キリスト教は科学技術の時代には役に立たない古い考え方であり、よってキリスト教に固執する人たちは頑固者で性少数者を差別する集団であり、犯罪者であるとまで唱える人々が権力を増大させている。

欧米社会の反キリスト教文化の流れは、本当に科学技術文明の発展が原因なのであろうか？　物質文明には、精神文化をそこまで変える力があるのであろうか？

第二次世界大戦後、アメリカは世界最強の国家として科学技術の発展に大きく貢献しているが、同時に、手堅いキリスト教国家であり続けた。今も、合衆国大統領ドナルド・トランプをはじめとして、アメリカの閣僚のほとんどがクリスチャンであり、アメリカ人の約 70%は自らをクリスチャンと称している。アメリカが最高の科学技術文明を誇る強大国に成長し得た要因として、清教徒精神が挙げられよう。科学技術による文明の発展は、キリスト教の衰退要因ではありえない。

世の中が反キリスト教的に変わって行く理由

それならば、20 世紀半ばから 21 世紀にかけて世の中を反キリスト教的な方向へもたらしたのは何であろうか？

クリスチャンたちは主日に教会に行き、神の御言葉通りに生きようと日常的に努力し、牧会者たちは教会のリバイバルと聖徒の信仰成熟のために尽くしている。

しかし真実なクリスチャンであっても、周りで毎日少しずつ起きている政治的・文化的変化に知らないうちに慣らされていくのだ。そして、ある日突然、世の中が恐ろしいほど変わってしまったことに気づき、ソドムとゴモラで暮らすロトのように心を痛めることとなる。

世俗主義こそが、100 年にわたって欧米の文化を反キリスト教的なものへと気づかぬうちに変質させてきたのであり、それを終末論的現象だと信じて受け入れるクリスチャンもいる。こ

のような信仰には、今起きている現象を、逆らうことのできない時代の流れとして、受動的に受け入れてしまう危険性がある。主は不義を喜ばれない。宇宙の統治者であられ、歴史の主管者であられるイエス・キリストの統治の笏は正義である。だからクリスチャンは、不義と悪の存在に対して、とりなしの祈りと正しく良いわざと真理の宣言で立ち向かうべきである。クリスチャンが不義に対して沈黙、また同調するならば、その社会は審判を受けることとなるだろう。

反キリスト教的な流れは、終末が近いから不可抗力的に起きているのではない。このような流れにクリスチャンが同調してきたゆえに、キリスト教国家の基盤が崩れ、その結果、ヨーロッパの多くのキリスト教国家がキリスト教の墓になってしまったのだ。この問題に処するためには、キリスト教を脅かす世俗主義の源、すなわちサタンの悪巧みを暴くことから始めるべきだ。

キリスト教世界観を論ずるランス・ウォルノーは、その講義の中で、イエス・キリストの国を弟子化せよという命令を実行するために、個人伝道だけではなく国家の司法、政治、経済、文化（言論と芸術、芸能）、教育、家庭、宗教を変化させなければならないと訴えてきた。彼は最近次のように話している。

「クリスチャンは積極的に国家の七大領域を弟子化すべきである。特に政府は重要だ。政治的指導者は他のすべての分野に影響力を及ぼす。敬虔な政治指導者を選ぶことが大事だ。」教会とクリスチャンたちが個々の教会の成長と繁栄にばかり気をとられている間に、サタンは積極的に国家を弟子化している。2000 年代初頭、アメリカでは新生クリスチャンのジョージ･ブッシュ

大統領が選出され、保守派が台頭していた。

これを妨げるために2004年に少数の人たちが集まり、アメリカを進歩派の方向に向けさせるための計画を立てた。彼らは自分たちの計画に同調する100名の富豪を招待して各々100万ドルを寄付させ、その金で平凡な名の組織を数十個立ち上げた。その組織は表面上、独立したものであるかのように見えるが、事実上、この少数の人々の計画通りに富豪たちの資金を動かすためのものであった。

この組織は、70%の国民が同性愛に反対している状況の中で、組織的に連合し、同性婚の合法化といった進歩的政策を求める声をメディアと政界に向けて高く唱えた。すると、数十個の民間団体が同性婚を支持する発言を唱え始め、何人かの政治家がそれに同調しだした。アメリカの人口の3%にも満たない人たちの策略によってアメリカの法律が変えられ、アメリカの政治、言論、文化芸術、宗教、ビジネスが進歩派の方へと引っ張られたのだ。」

過去100年間、ヨーロッパとアメリカにいる少数の闇の勢力はキリスト教の基盤を揺るがすことを企て、自分たちに同調する富豪たちから巨額の寄付を受けて様々な組織を立ち上げ、言論、学問、文化、芸術、政治、事業、宗教界を操り、ついに国家全体を非キリスト教化させる巧妙な作戦を実行してきた。サタンのやり方は、このように巧妙で積極的である。だから教会は目を覚まして国家の全領域のために祈り、見張り、積極的に立ち向かっていくべきである。†

この地を愛せば、天から食物が与えられる

チョン・ヨンヒ
ブレドゥンベーカリー＆コーヒー代表

私の名刺には三つのブランド名がある。ブレドゥンベーカリー＆コーヒー、ブレドゥンプラス、ブレドゥンフードシティー。共通点は、すべてブレドゥンから始まっている。漢字では福来天である。祝福は天からくるものであるが、この祝福をくださるのは、すなわち、神様であるという意味である。名刺の裏には「天愛食品管理有限公司」と書いてあるが、これは天を愛する企業という意味を含んでいる。その通り、私が今の私になったのは、すべて神様から始まったことなのである。

大変な幼年時代であった。小学校5年のとき父が亡くなったので、36歳の若い身空で 4人の兄弟を一人で育てなければならなかった母。それゆえ、長男の私は、幼いときからお金を稼ぐため、新聞配達、露天商から始まって、あらゆる仕事で、経験しなかったことがないほどであった。生活苦のため中学2年のとき、完全に学校を離れて生存のための闘いに入らなければならなかった。当時15歳で中華料理店の出前係として雇われ、ちょうど1ヶ月目の最初の給料日、約束のあんパンを買って家に着いたのは夜の12時すぎであった。片手には母の下着を持って。

幼い弟たちはすでに眠り、母は主人を待って冷めた菜っ葉汁を温めなおした。兄が約束通り、あんパンを買ってきたので、

目をさました弟たちはそのパンをペロリとすべてたいらげてしまった。ところが母は、パンを口にしようとしなかった。「お母さん。パンを召しあがってください。」ビニールを剥がして母の口に入れようとしたものの、母は慟哭した。寒い冬、手袋もなく、おかもちを持って走り回った息子の手があちこち切れて血が流れていたためであった。

「息子や、ごめんね。私に力がないばかりに、おまえたちを生んでも面倒を見ることもできず、苦労ばかりさせて。」母が泣くと、5歳の末っ子から泣き始め、私たち家族5人は互いに抱き合って泣いた。そのとき自分でも気づかないうちに私は言った。「お母さん泣かないでください。私は必ずパン屋の社長になるから。」その日、あの狭い部屋 には私たち家族5人の他にもう一人の方がおられた。その方こそイエス様であった。

小学校1年のとき、母に従って通うことになった教会。初めは教会がとても好きだった。ある日、教会の窓ガラスで手を切ることがあったが、驚いた伝道師が私を連れて病院に行って治療してくださり、おいしいパンばかりか靴まで買ってくださった。私の幼年時代の教会は、このように暖かくて素敵なところであった。しかし、思春期もすぎて20歳を過ぎた私は、環境と状況に疲れ果て母を恨んで神様を無視した。「神様が生きていらっしゃるのなら、何故、あれほど熱心に祈られた母にこのような試練を与えるのだろう。」という思いを抱くようになった。

それで、ある日、勉強すべきだという決心を抱き、考試院へ行った。昼は生存のための闘いに、夜は勉強に邁進した。ここで私はある伝道者と出会った。その方は、私を見つけるや、肩をポンと叩いておやつをくれると神様を伝えた。私の反抗的な質問と攻撃に、その方はいつも真摯に答えた。分からない質問には、

特別に勉強までして教えてくれた。それで私は、質問をするなら聖書が分からなくてはならないと、その方からもらった聖書を創世記から読み始めた。御言葉のなかで私は再び神様と出会った。こうして、私の傲慢、自意識、すべての欲望を主の十字架の前に下ろし、私の人生の主人としてイエス様をお迎えしたのであった。

このような信仰の覚醒と共に私の母に対しても、完全に180度、態度が変わることを経験した。 中学・高校のすべてを検定考試で合格した後のある日、家に帰ったのだが、母が食膳で渡した器の角度が全くおかしなものであった。変だなと思い、箪笥から書類を見つけ出すと、そこから母の病院診断書、手術結果、処方薬の包みを発見した。「視覚障害二級」

母は私の妊娠期間に妊娠中毒症を発症して視力に問題が生じた。その1ヶ月間、空を見上げることもできなかった。私はインキュベーターに1ヶ月間いなければならなかったし、結局、母の片方の目は完全に失明してしまった。私はその日、ひょっとしたら母が聞こえるかもしれないと、ふとんを被って涙を流した。気が付いた母は、他の部屋で涙を流してただふき掃除だけをしていた。 私は、この日、いままでの母に対する態度が間違っていたことを悟った。そのときから、母を心から尊敬するようになり、すべての言葉遣いも敬うものに変わった。私は母に細心の心遣いをするようになった。 この日、母と私の間にはイエス様がおられた。

IMFで多くの人々の生活が苦しかった1998年、たまたま東仁川駅で下車して何となく歩いていると、目の前に仁川港があらわれた。そこには、中国と韓国を往来している多くの人々が見えた。当時、私の目の前に広がる様子は、エゼキエルが幻で見

た谷間の乾いた白骨のようであった。主が息を吹き込んですべての生命が生き返る感じを受けた。「そうだ、行商を始めよう。中国へ行こう。」それで母と相談の末、熱心に祈ったあと、母の知り合いの方の助けで借りた 120 万ウォンを持ってリュックサック 1 つだけを担ぐと、仁川から中国へ向かうペリー号に乗り込んだ。75 歳で神様の命令に従順してカルデアのウルを離れたアブラハムの心情が思い浮かんだ。

数百名におよぶ、行商人と事業者の、すべての待ち人のなかで、唯一私だけが乗船の目的地がどこか知らなかった。言葉ひとつ通じない恐れの中で、箴言 16 章 9 節の御言葉が思い出された。「人は心に自分の道を考え計る。しかし、その歩みを導く者は主である。」この御言葉をつかんで祈るとき、神様は、たったひとり出迎えも無く歩いていく者をご覧になられた。こうして、この人があてもなく歩いてたどり着いたのが江南商会であった。何とその社長は韓国の方であった。これが私の事業の始めである。中国と韓国を往来して農産物の取り引きをした。小さな私の事業を準備した (ソウル商会)。良い場所がなく、サウナにいて手拭い一枚で冬を越して熱心に働いた。神様のときが訪れると、私は直接、ごま油 (ソウルごま油) を作って販売先を増やすことができた。思いもよらない終生の伴侶、賢くて可愛い妻と中国で出会い、うさぎのような 2 人の娘も授かった。紙面にいちいち書き表せない奇跡を、神様は、私の人生で体験させてくださった。

ブレドゥンというブランドを旗印にして中国全域 30 余ヶ所のベーカリー & コーヒーチェーン店を生み出し、レストランや食品関連事業まで、神様は、私の地境を広げてくださった。その上、威海地域ロッテ百貨店食品売り場に入店した世界的なブ

事業のパートナーである愛する妻（ティエン・リ・シン）と信仰の心強い支援者である、またいとこのチョン・ユンデ牧師と

ランドを差し置いて 、ブレドゥンベーカリー & コーヒーは、売り上げ 1 位を記録した。それだけでなく、神様は、私が住んでいる威海地域の僑民会長をはじめとして在中国韓国人会の首席副会長職までを私に任せられた。神様は、30 余年前に流された、15 歳の少年と寡婦の涙を覚えておられた。そして、その少年のパン屋の社長になると言う宣言も聞いていた。

母はいつも私におっしゃった。「ヨンヒ、感謝は信仰の器です。その器がなかったら神様は、絶対に私たち器を満たすことができません。感謝は、私たちが後ろに倒れても、また鼻がつぶれても、神様に捧げなければならない第一のものです」と。さらに、妻は私を感動させた。ある日、先の四川省大地震で父母を失ったため、奨学金をもらった子供たちから、私宛に小包が届いたのだが、「私たちも、奥様のように社会に出て、苦しい思いをしている友人を助ける人になりたい」という手紙があった。その理由を調べてみると、妻がこっそりと子供たちを助けていたとのことであった。これこそ企業が社会に還元する方法である。これは、農夫がその土地と人を愛する方法である。そして、神様は、私たちに感謝と愛を求めておられる。神様は、私たちをあまりにも愛して、御自身と等しいイエス様を、私たちのためにお遣わしになられたのだから。†

世界で一番美しいお母さん

イ・ヒョジン
イェイン建築研究所代表

私は、生まれて１歳６ヶ月を迎える時に、練炭を使用する釜戸で湯を沸かしていた大きなやかんに、逆さまに転げ落ち、顔全体に火傷を負ってしまった。それで私の顔は、まるで怪物でバケモノのようだった。そして障害者３級の診断が下った。周りの反応を意識して、私はいつも髪を伸ばしてその髪で顔を隠し、足元ばかりを見て暮らしていた。私は、何のために生まれたのだろう。そう思う度に死にたいと思うようになった。私の母も、火傷を負った私を抱えて、「娘と一緒に死にたい」と泣き叫ぶ毎日だった。

そんな中、私の火傷の事故から、家族はキリストの救いを受け入れ、そして後に母は、イエス・キリストに出会える体験をした。母は、クリスチャンへと変わっていった。ゆえに、幼い私も、母と一緒に教会へ通い始めて主日は教会に行くようになった。けれど私は、顔に残った火傷の痕のことで、神様をとても恨み、神様を心から頼りにはしていなかった。学校生活が始まると、イジメと偏見による辛い日々を送った。イジメと偏見から避けられる方法はなかった。ただただ、死ぬことばかりを考える毎日だった。一体何のために生まれたのだろう。つらい仕打ちを受け、何の希望もないままに暮らす私は、ひたすら神様

家族写真。
美しい妻、美しい母になりたいイ・ヒョジン代表の祈りの応えである。

を恨み続けた。イエス・キリストの十字架の苦しみは、一日で終わったけれど、私のこの耐え難い日々は、一生終わることもないように思え、イエス・キリストの十字架よりも、私のほうがずっと重い、辛いはずだと、不満を吐き出していた。

大学２年のある日、華やかな５月のキャンパスライフで、若者たちの生き生きする姿がとても羨ましく見えた。そんな５月の眩しい太陽の下で、自分の姿が何だか寂しく貧しく見えた。卒業後は、周りの友人たちは美しく羽ばたいて行くのに、私は就職にも結婚にも程遠く、何の望みもない生活に挫折した。その苦しみから耐えられなくなって、暴飲暴食へと走るようになってしまった。体重が 20 kg も増えていくうちに更には、対人恐怖症にまで陥った。そして 21 歳の時、睡眠薬を 100 粒も飲んで自殺未遂の騒ぎまで起こした。当時の私にとっては、地獄へ行く方が、この現実を生きて行くよりずっと楽なように思えた。神様から与えられた命を自ら絶つことで、神様に逆らい、神様に復讐の方法を選んだ。

そうして意識が朦朧とする中で祈った。「朝を迎える事がない

ように……。」しかし、兄に発見され、私は病院で目を覚まし、やがて絶望した。田舎から飛んで来た母は、「ヒョジン、あなたが死ねば、私も死ぬ」そう言って母は叫ぶように泣いていた。私も、薄い意識の中で、母の命と私の命が繋がっていることを知り、激しく泣いた。母のためにも生きよう、そう私は決心した。

そんな中、私が希望を失わぬよう、母が早天祈りを捧げに行くはずだったある日のことだった。娘のために涙の祈りを捧げる母が、溢れる愛を注いでくれた母が、交通事故による即死でこの世を去った。母が亡くなり、私はまたも死を考えた。生きる気力を無くしてしまった。しかし、私の苦難の中に神様は救いをもたらし、私に会いに来られた。後に私は、母の最後の祈りを、牧師先生の奥様から聞いて泣いた。区域礼拝のとりなし祈りの中で母の祈りは、「娘のヒョジンがイエス・キリストに会い、主の御言葉を体験させること」を頼んでいたということだった。そうして母が天に召された事故は、私がイエス・キリストに会える救いの恵みとなった。

美しき妻にして下さった神様

母が亡くなってから、私は心から神様を信じるようになった。後に、水のパプテマスを受けた日に、神の御声が聞こえて来た。「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたを支える。」(イザヤ 41:10)

私の中におられる方、助け主聖霊様からも、これからあなたは、「ミスヘブンになれ」と、新しい名を与えられた。「ヒョジン、

あなたは、世の中では美しい基準には入らないけれど、神の国ではあなたは愛される愛しい人、ミスヘブンになれる人だ。」

以後、私は神の国を広報する団体に所属し、広報大使として活動を始め、命ある限り神の御言葉の証人になることを誓った。真の神様に出会い、神様を深く知り、そして将来の配偶者になる人のためにも祈り始めた。配偶者の新名を考えて、虎のように勇ましい男性像を絵に描いて、勇虎と名付けてから、勇虎氏と名前を呼びながら祈った。勇虎氏への手紙も書き、持ち歩いた。

以後「あなたの弱さを誇りにしなさい」の本を出版し、その本の中で、私の配偶者になるであろう勇虎氏のために祈りつつ待ち望んでいることも書き加えた。

ある日、その本を読み終えた信仰を持つ兄弟が私に会いに来た。何と、まるで映画のように、勇虎氏と会える奇跡が起きた。そして私は、使命の道に従う途中で、たくましい配偶者に出会わせて下さった神様に感謝の祈りを捧げた。兄弟は、私の顔にある火傷の痕を気にしないと言ってプロポーズをしてくれた。勇虎氏の妻という身分になり、なおも私は神様に感謝した。私は全能なる神様を愛し、神の御言葉を愛する。夫を尊敬して、夫に従いなさいという神の御言葉を胸に刻み、夫に尽くしていこう。そんな私を、夫はいつも大切にしてくれる。我が家は、イエス・キリストの御言葉を中心になる家庭になった。

美しい母にして下さった神様

結婚して間もなく子宝に恵まれた。新しい小さな命を私に授けて下さる神に感謝して、日々愛と祝福を我が子に注いでいる。胎内にいる時から「愛してる、ありがとう」の祈りは欠かさず

続けていた。反面、子どもたちが大きくなる過程で、自分の母の顔に悩んだり、反抗されることへの心配もあった。その心配が伝わったのか、子どもたちを寝かせようとしたら息子が私の顔をじっと見つめ、「母さんは、とてもやさしい人、綺麗人、おしゃれな人」と言ってくれた。私は生まれて初めて綺麗、お洒落という褒められる言葉を聞いた。そんな息子を強く抱きしめて大粒の涙を流した。

幼い頃からいつもイジメの対象だった私。神様は息子を通して、生まれてから長年傷ついた私の心に慰めを与えてくれた。神様から祝福される妻となり、神様から祝福される母になった私は、神様に心から感謝した。息子が 6 歳になったときに、「母さん、地球はとても素晴らしい！なぜなら、僕の母さんがいるから」そう言ってくれた。息子を通して神様は心の傷を癒して下さる。子どもを成長させるアイテムは、「聖書」であり、そして神の御言葉を中心に成長させるために、育児の知恵を求めて祈りを続けた。その祈りの実が実り、「世の中で一番美しき母」を出版させてくださった。火傷の痕がある顔を持った私を、世の中で一番美しい母と言ってくれる子どもたち。神様から授けられたこの子どもたちを、神の御言葉の中で成長させ、神の御国に入るまでが、母なる私の使命だ。私の母が、娘の私にイエス・キリストの救いの十字架に出会わせてくれたように、私も子どもたちが、イエス・キリストの救いの十字架に出会えることを祈る。

最後に、「私をあなたの思うままに用いて下さい」という祈りの答えで、あなたの弱さを誇りにする、ミスヘブンからミセスヘブンに至るまで、色んな形で用いられた神様を称え、栄光と感謝を捧げます。「父なる神様！大いに愛します！」 †

献金は恐れのない信頼

私は、110 年の歴史を持つホーリネス教団の母教会、中央ホーリネス教会に仕え牧会しながら、献身する大勢の方々に会ってきました。その中で記憶に残っている方は、匿名で一億ずつ三回献金した方です。初めてあの方と会ったのは 5 年前、牧会チームの会議を終え、自分の部屋に戻る途中の廊下でした。

私は、みすぼらしい服装のその方は、何か頼み事があって来ているのだろうと思いました。私に直接話がしたいと言うので、少し迷いました。けれども、それでも会ったのだからと思い、「どなたですか」と尋ねました。教会の聖徒だというので部屋に迎え入れました。

「何の用件で来られましたか」と尋ねると、紙袋を出して「宣教師先生のお子さんの中で、特にお嬢さんの方の奨学金として使って欲しい」というのでした。誰にも分からないように無名にしたいため、約束もしないでこのようにそっと来たと言うのでした。それでお祈りをし、事務所から人を呼んで、入金をするようにしました。事務所から、その中に入っているお金が『一億』だということを聞いて、私は再び驚きました。

私は、実はあの方が教会に長く通っていたにもかかわらず、聖徒だとは知りませんでした。私は、時間を作ってあの方の家を訪ねました。一生を教会に忠誠している勧士さんを母に持ち、つつましく暮らしている親思いの人でした。自身のために使うところが多くあるように見えたものの、自分は耐乏生活をしながら、人を育てる奨学事業と宣教師の後援に最善を尽くす方でした。

あまり経たないうちに、あの方がまた、一億を持ってきました。私はあの方を按手執事にしようとしましたが、本人がかたくなに断ったため、できませんでした。そして、土曜日に私が普段より早めに教会へ行くと、あの方がまた訪ねてきました。木曜日に来たが、私が祈禱院に行っていたので、そのまま帰ったということでした。

誰にも知られたくないので、金曜日に早く来て部屋の前で待っていると、待つ間に心に葛藤があったと言いました。「今やっている事にお金が必要だが、これを使ってしまうかな？」――銀行からお金を持って教会に来るまで、多くの葛藤があったそうです。もし土曜日にも牧師先生がいなかったら、このまま必要なところに使おう、と思って来たということでした。しかし、その日私が早めに出ていたのが幸いなことだったのでしょう

か？ やはり封筒をおいて帰りました。いくら入っていたでしょうか？一億です。これが三回目です。

献金は余裕があって捧げるものではありません。そして、献金を捧げようとする心の想いを実践に移すまでには、多くの難しい過程を通過します。事実、献金は恐れとの闘いです。献金は持っている物がないとか、勿体ないからできないこともありますが、恐れのゆえにできないのです。この少ない収入から十分の一献金を捧げて、はたしてやっていけるだろうか？いま、持ってる物を全部捧げて、明日は大丈夫だろうか？このお金で子どもたちが欲しがるものを買ってあげられるのに、それでも捧げるべきだろうか？ 私たちの献金の金額は、信仰と恐れの間で、葛藤の中に決定されます。

従って献金は、恐れのない信頼です。献金は信頼の程度です。「あなたの物質のあるところにあなたの心がある。」（事実上、財布と心は近くに位置しています）という御言葉は、『あなたの献金があなたの信頼だ』と解釈できます。もっと強く言うのなら、『あなたの献金があなたの信仰だ。』――私は、余りにも世俗的に言いましたか？ それでは、少しは現実的に話してみましょうか？ 銀行に行けば、私のクレジット（credit）を調べて、融資限度額を決めてくれます。数字的にいえば、その融資限度が、銀行が私を信頼する度合いです。それ以上超えると不安になるのです。私がどれぐらい神様を信頼できるかは、献金に現れます。

さいせん箱に、レプタ二つを捧げた貧しいやもめ（マルコ12:41～44）の話があります。二つのコインがやもめの生活費の全部であれば、一つのコインを残しておき、一つだけを捧げ

ても良いのに、なぜそうしなかったのでしょうか？ きっと心の中では、一つだけを捧げて一つは残そうか、いや、二つ全部捧げようかという葛藤があったことでしょう。二つを捧げることは、やもめが献金を捧げた後には不確かな状況に陥るということです。

やもめのレプタ二つの献金を、イエス様が献金の模範とされたのは、物質の量ではなくて、神様を完全に頼る信仰のゆえです。恐れのない信仰です。彼女が頼るのは、ただ、彼女の必要を満たしてくださるという神様の約束だけでした。信頼の道とは、明確に確定されている未来に入ることではなく、曖昧で不確実な未定の世界に自ら入ることです。神様に入ることです。

一定の献金以上の献金をしなければならないときに、牧師の私にも恐れがあります。十分に果たせる程度を選択すると恐れはありませんが、その代わり、成長や神様を経験することができなかったりする危険があります。恐れは、信仰の成長を望む誰にでもあります。棒高跳びを考えてみて下さい。どんな人にでも超えられる高さには、新しいチャレンジがありません。しかし、普段よりもっと高い棒高跳びに挑戦すると、常に恐れがあります。不確実性の状況から、あなたの未来の財政を、目に見えない神の御手に委ねるのは、胸の躍ることです。献金は恐れのない信頼です。†

使徒信条は聖書にはないが、なぜすべての信徒が告白するのか？また使徒信条を告白しなければ異端なのか？

使徒信条は、簡単に言えば、信者として信じるべき基本的教理を、簡潔に要約した標準的な信仰告白である。伝説によれば、ＡＤ 70 年、エルサレムが陥落する前に 12 使徒が集まり、信じ、教え、伝播すべき内容を一言ずつ語り取って、まとめたものだと言うのである。もちろん、使徒信条は 12 言葉で構成されているのは事実だが、使徒ヤコブは、それ以前に早くも殉教し、他の弟子たちは、福音伝播のために各地に散らばっていたので、そのような集まりを持つ状況ではなかった。ただ、325 年のニカイア公会議とコンスタンティノープル公会議、そして 431 年のエペソ公会議と 451 年のカルケドン公会議を経て、使徒信条が確定されたのである。上記の伝説も、404 年にルフィヌス（Rufinus）が書いた＜使徒信条注解＞を執筆する時、12 使徒がそれぞれ 1 節ずつ書いたと述べたことから生じたのである。しかし、使徒信条は、東方教会（ギリシャ正教会）では、一度も公的信仰告白として採択されず、ルターとカルヴィンも使徒信条を「教理問答書」には導入したが、礼拝順序には入れなかった。

また、どういう理由からか分からないが、原文の最後にあっ

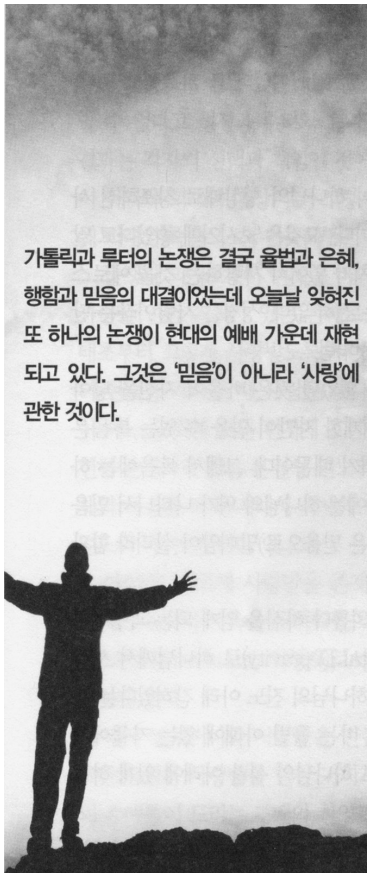
た「この信仰告白に反対する者は呪われる」という言葉が、英文と韓国語では取り除かれている。おそらく、あまりにも強い言葉のゆえに、取り除いたのであろう。もちろん使徒信条告白を信じない人は、本当の意味での信者だとは言えないのが事実だ。だからといって、使徒信条を礼拝の時間に告白しない人は異端だ、というのは言い過ぎだ。なぜなら、より現代的な教会では、使徒信条の代わりに、若者たちに分かりやすくするために新しい信仰告白をしている場合もあるからだ。

プロテスタントとカトリック教会は、聖書の用語の用い方が異なるため、使徒信条の用語も異なる。例えば、プロテスタントの使徒信条にある「聖徒の交わり」という言葉は、カトリックでは、「諸聖人の通功」としている。その意味は全く異なる。ここで通功とは、「生きている信者と死んだ信者間の霊的結合」であり、聖徒の功労と祈りが通じるという意味である。これは煉獄説の根拠にするためだ。カトリックでは、聖徒という言葉は昔に亡くなった者で、特別の審議を経て叙階された福者（死後、聖徳を認められた者）と、聖人を指す言葉である。

また、「聖なる公同の教会」という言葉は、本来Catholic churchという言葉から由来したもので、「普遍的」という意味だ。そういう理由から、使徒信条を反対するのはあまりにも浅い考えだ。それで私たちは、「公同教会」という言葉に訳したのである。重要なことは、使徒信条よりももっとキリスト教の教理を正しく要約したものがないため、これを礼拝時間に告白するのは正しいことである。†

ソン・ヒョンギョン 牧師　アメリカ・ニュージャージ・ゴスペル・フェローシップ教会

ルターがカトリックに抵抗したもう一つのもの、エロス



カトリックとルターの論争は、結局、律法と恵み、行いと信仰の対決であったが、今日、忘れられているもう一つの論争が、現代の礼拝において再現されている。これは、信仰というよりは、愛に関する問題である。

罪に悩んだ誠実で真摯なマルチン・ルターが、福音によりカトリックから出エジプトしたときの葛藤は、パリサイ人パウロが律法から恵みを悟ってユダヤ教と決別したときと同じくらいの戦いであった。パウロには、イエス様と出会った後、モーセが律法を授かったシナイ山のあるアラビアへ行かざるをえないほど、衝撃があった。モーセは

変貌の山でイエス様のかたわらにいたのだが、モーセにならうものと自任したパウロは、ダマスコへの道すがら、イエス様に従うものたちを殺そうとしていた。それは、自らこそがペテロの後裔として普遍的な真の教会であると自任したローマ・カトリックが、真のキリスト者を殺そうとしたのと同じものだった。

カトリックとルターの論争は、結局、律法と恵み、行いと信仰の対決であったが、今日、忘れられているもう一つの論争が、現代の礼拝において再現されている。これは、信仰というよりは、愛に関する問題である。

先日、教会での聖書勉強会でこのことを分かちあったところ、神父様の友人がいるという方が自ら出向き、その友人に尋ねて確認してくださった。カトリックで使う信仰という単語がルターの語った意味と別物のように、愛という単語もカトリックとキリスト者とでは、それぞれ意味が違う。事実、カトリックはキリスト者ではない。歴史家のロートレットは、「フランス東南部地域に住んでいたブルグンド族は、西ゴート族の侵入とともにクリスチャン（Christian）となった。彼らは、かつてカトリック（Catholic）であった。」と記録している。いかなる者も真理を捨てて一つになることはできないのである。

カトリックでは、神様が人間を愛されるのは、神様の似姿として創造された人間に、神様が愛するだけの価値があるからだとする。それはご覧になるのに良しとおっしゃられた神様の創造に基づく。このように愛するだけの価値があるから愛すということをエロス（Eros）という。聖書全体にエロスという単語は全くない。聖書は愛という単語をとても注意した。ルターが

免罪符を注意したように。

ルターが、彼自身を育てたカトリックから受け入れられなかったことは、パウロが、彼自身を生んだユダヤ教から出行くほかなかったことと同様である。悔い改めるべき高ぶる人間が信じることのできる福音は、創造から始まるのではなく審判から始まるからである。それゆえ福音には、神様の愛でなく、義が啓示されているのである。「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、“信仰により義人は生きる”と書いてあるとおりである。」（ローマ 1:17）。

ところが、罪に悩んだルター神父が、信仰によって義とされる過程で悟った真理とは、人間は完全に堕落した存在（Total Depravity）であり、神様が愛する理由が全くないということであった。罪を犯した人間は、神様の御怒りの下に閉じ込められているという事実。「さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法のもとにある者たちに対して語られている。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神のさばきに服するためである。」（ローマ 3:19）。

この悟りにより、ルターはいかなる良いわざをもってしても、その御怒りをひるがえすことはできないという絶望により、ただ信仰だけで救いに至るという実体験を経験することになる。その恵みは、救われ、愛されるに値する資格がない神様の敵だった私たちを愛される愛、すなわち、ギリシャ哲学者がこの世の中にないとするアガペー（Agape）であった。

カトリックは、罪を犯す前の創造と始まりにおいて人間を見、

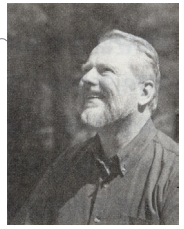
ルターは来たるべき審判と終末のもとで人間を見る。これはまた、癒し（Healing）と悔い改め（Repentance）に対する観点の違いと一致する。人間を癒そうという観点はその出生から今までの、その人間を形成してきた父母や環境との関係を優先する。間違った環境の中に育った、間違った人間を癒すことである。ところで、いつまで人間を癒しの対象として考えるべきか。死ぬときになって主の審判台の前に立つとき、私たちは言い訳できないと、聖書、ルター、ジョナサン・エドワーズ、清教徒は言っている。すべての人生の結果は各自の選択と責任による。人生の終わりに近づくほど、人間は癒しの対象ではなく、悔い改めの対象となる。そのような人は、過去の出生から今に至るまでを癒しの対象とすると同時に、未来の死から逆に今をながめるとき、それを悔い改めの対象とする。

出生と過去から現在を眺めるとき、人間は神様が御自身の似姿のままに創造された、愛される価値のある存在のように見える。どれほど人間が尊い存在として世の初めから、こうも神様から愛されて創造された存在かということ。しかし未来の審判と死ぬべきものとして現在をみるとき、人間は、神様の御怒りの下に置かれた悔い改めるべき存在である。パウロがある教会に送った手紙に書いているとおり、人間は、主が愛する理由を全く持たない本質的に御怒りの子である。「また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生まれながらの怒りの子であった。」（エペソ 2:3）。

皮肉なことだが、愛される存在だと教えたローマ・カトリックの神父としてルターは罪に苦しんで地獄を恐れたが、自身が御怒りの下に置かれた罪人であることを悟ったプロテスタント（Protestant 抵抗者）としてのルターは、死を恐れない、罪を赦された確信を持つに至った。

さらに言うと、愛される価値があるから愛すというのが、エロスであり、愛される価値がないにもかかわらず、愛するのがアガペーである。現在、ルターの後裔がささげる礼拝と賛美の中には、ルターがこれほどまでに抵抗したエロスの愛が満ち溢れている。あなたは愛されるために生れてきたのだとか。神様はあなたのために驚くべき計画を持っておられるとか。こうしたものは危険である。福音はこう言っている。キリストのそとにいるあなたは、いま神様の御怒りの下にあるのだと。†（7月号より）

ベン・トレイ／イエス 院理事長、サンスリョンセンター本部長



この世と妥協してはならない

このコラムを読んでいる方なら、私が北朝鮮解放を準備するにあって、多くの関心を寄せ、教会が一つになることこそが最も重要な準備であると考えていることに気付くはずです。主が私の心のうちに、神のみからだなる教会の連合に対する心を与えられたのは数年前に、北朝鮮解放準備について、主からの強い召命を受けた直後でした。それ以来、長い年月をかけて「連合」に対する多くの文を書きました。そして、私の父デ・チョンドク神父もやはり、連合について、本当に多くのページを割り当てました。父のコラム「山奥から届いた手紙」では、連合とコイノニアに対する勧告の内容が多く含まれています。主は、父と私、私たち二人にそれぞれ同一の任務を与えられました。

また主は、北朝鮮政府がなぜいまだに存在しているか、指導者の残忍性や体制の問題点を見ても滅びるしかないにもかかわらず、どうしてまだ崩壊しないのか、その理由を示してくださいました。それは、主がまだそれをお許しになっていないからです。主は、教会が一つになるよう、少なくとも現在よりはなお一層、一つになることを待っておられます。教会が分裂されたまま早く北朝鮮に入るよりは連合して入ったほうが、主にとって重要であるからです。今や北朝鮮が解放されれば、無実に監獄に囚われている人たちを解放し、苦痛に遭っている人たちに食事を提供するなど、現在の多くの苦痛を分かち合えるかもしれません。

しかし、分裂された教会の今の姿のままだと、北朝鮮の人たちが救い主として来られたイエス・キリストに出会うために、キリストのみからだなる教会として一つの共同体となることが難しくなります。さらに、連合において最も重要なのは、『愛』です。最近コリント人への第一手紙 13 章を中心に二カ月にわたり、愛について学びました。主は絶えずこの主題に戻るようにされます。今月は、愛とその実際的適用と影響について、ローマ人への手紙 12 章の御言葉をもって考えてみたいと思います。

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。」(ローマ 12:1 ～ 2)

神の慈しみ

使徒パウロは私たちのすべての望み、私たちの存在そのものを神に捧げなさいと訴えます。パウロは、これは決して簡単で容易ではないことを明確にします。それは犠牲です。しかし単純な犠牲ではありません。これは聖なる犠牲です。生きている

存在として私たちが捧げるべき犠牲であり、生涯捧げ続けるべき犠牲なのです。私たち自身を一度のみ捧げる、個人的欲望を殺す一回だけの犠牲ではなく、生きていく間、一生続く犠牲です。私たち自身を捧げる、すべてを神に捧げること、これがすなわち、神に喜ばれる礼拝なのです。もちろん、私たちの祈り、感謝の告白と賛美は神に喜ばれます。

私たちの人生が、分け与える人生、仕える人生となったとき、より主に喜ばれるのです。多くの人々が知っているように、イエス院では「労働は祈りであり、祈りは労働だ」という標語があります。これは、私たちの体で捧げる礼拝、仕える人生、私たち自身を実質的な方法で、神の御目的のために――御計画に従って――捧げることを意味します。これこそ、神が探しておられる礼拝、真に神に喜ばれる礼拝です。

そして、次の節は変化を話します。私たちはみな、いかなる形にせよ、実際はあらゆる方法で、この世と妥協しながら成長してきました。文化に、背景に、住む場所に、一緒に暮らす家族に影響を受けています。また、私たちは周りの人たちのように考えます。周りの人たちを優先に思うこと、ＴＶやインターネットを観ること、新聞を読むこと、ラジオを聴くことを重要視します。浴びるほど溢れ出てくるニュース、ＴＶで接する多くのトークショー、これらに囚われています。何を買い何処で学ぶべきかを宣伝する、あらゆる広告に溢れた世界――これらが私たちを圧倒させます。他の人の考え、他の人の必要が洪水のように押し寄せてきます。昼夜に絶え間なく押し寄せてくる暴雨から逃れようと、どれほど意図してきたでしょうか？

使徒パウロは、神のあわれみをもって強く勧めます。そのすべてを拒否しなさいと、この世に妥協してはならないと。しかし、

どうすればそのようにできるのでしょうか。私たちの心と考えを新たにすることで、新しく変えることで可能になります。私は、「新たにする」という表現が好きです。これは、主が神のいつくしみによって、私たちのうちで働かれる変化です。使徒パウロは、私たち自らを新たにしなければならないとは言わず、新たにしなければならないと言っています。

私たちは、自らを変化させることはできません。これは仏教や他の人本主義的哲学でいう誤謬です。共産主義や社会主義には根本的欠陥があります。私たちはみな、堕落し腐敗した存在です。それゆえ、自らをより良く変えることはできません。より良い世を造ることもできないのです。私たちが受け継がれたものは腐敗です。母親の乳を飲む瞬間から、アダムから始まって世代を通して受け継がれた罪に染まっています。私たちが没頭する文化は、腐敗と人間的価値を基盤としています。

すべての世的な価値は結局、死へとつながります。しかし神は、大いなる御愛と驚くべき慈しみによって、私たちを救ってくださいました。私たちの考え、思考過程、遂には欲望までも新たにされ、私たちを救ってくださるのです。私たちの考えと心が新たになったとき、私たちが創った文化や世的な価値の足枷から抜け出し、本当に良いもの、神の御旨にかなったものを喜ぶようになります。

3節からの実際的な意味は、私たちがどうすればこの世に妥協せず、神の国についていけるだろうか、新たになった生き方ができるだろうかについて話しているのです。

「わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、

慎み深く思うべきである。（ローマ 12:3）

愛と赦し

神の御恵みと新しく変えられた心があれば、私たちはやるべきことを自分自ら悟るようになります。神が私たちを見ておられるように、自分の本当の姿が見るようになります。実際、私たちは人生のほとんどの時間を他の人々と比較したり、あるいは、幻にすぎない願望をもって生きています。私たちが他の人より優れていると、より賢くより熱心で勤勉に働いていると、より美しく格好いいと、より大事に思われていると考えます。ないしは、自分には何もできるものがないと、失敗者だと、弱くて可哀そうな人だと思っているかもしれません。しかし、二つともそれほど重要ではありません。本当に重要なのは、主が私たちをどう見ておられるか、です。神が私たちを見て評価されるのが、本当の私たちの姿です。この神の評価を受け入れたとき、私たちは自身の罪を悟るようになります。さらにより重要なもの、神の驚くべき愛と赦しを悟るようになります。私たちは主の子どもであり、神の御子イエス・キリストの血潮によって、そして聖霊の御力によって変えられたことを悟るようになります。それにより、私たち自身を正しく評価し、その評価に対して真剣に考えるようになります。

3節の最後の部分は、かなり衝撃的です。これはまた、多くの質問への回答でもあります。私たちは、神が私たちに与えられた信仰の尺度によって自分自身を見なければなりません。要するに、自分にはどれほどの信仰が与えられているか、それは何のための信仰なのか――これに対する心配は不要です。神は、人それぞれに量りに応じて信仰を分け与えられます。この分量

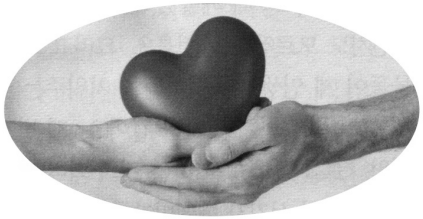
は私たち自身のものです。他の人々に分け与えられた信仰とは違います。これは、私たちが力を尽くして従っていくべき信仰です。自分の決定から出たものではありません。神によって授けられた信仰です。私たちの努力によって得たものではなく、神からの贈り物です。この部分については後に、より詳しく見てみることにします。

しかし、今この瞬間、主に従順して聖霊のバプテスマにあずかった皆さんは、神が与えられた自分の信仰の分量を認め、その通りの考え方を持つように願います。ですから、私たちの信仰を他の人々と比較してはいけません。信仰が足りないからこの働きを成し遂げることができない、などと考えてはいけません。比較しないでください。他の人は信仰の巨匠のようで、自分には信仰もなくどうしようもない人間だと考えてはいませんか？ 他の人の信仰を見ないでください。彼らが持っているものは、主が彼らに委ねられた信仰です。皆さんの信仰は、主が皆さんに委ねられたものです。私たちは各々、自分に必要な分だけを悟ります。各自の信仰は、一つの絵を完成していくにあって、御国が完成されるために必ず必要なものです。

続けて見てみましょう。

「なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互いに肢体だからである。」（ローマ 12:4 ～ 5）

各自が信仰の分量を持っているという考え、そして人それぞれが異なるという考えは、必然的に私たちが一つの体の各部分であるということに辿りつきます。使徒パウロは私たちに、す



べての人が異なり、すべて異なる機能を持っているが、一つの体を形成しているということを悟らせてくれます。ローマ 12 章とコリント人への第一手紙 12 章は、互いに類する部分が多いです。最も類似する部分の一つは、まさにこれです。互いに組み合わせて一つのからだとなること、主にあって一つになることが必要だということです。もしも、私たちがみな同じ器官であるなら、その体は正常に機能することができなくなります。皆さんの体がそれぞれ違う、別々の器官に造られたこと――どれほど驚異的でしょうか。だから、皆さんは様々な多様なことができるのです。

なので、キリストのみからだと共にしましょう。私たちはみな、各肢体――信仰の分量が異なり、機能の違う肢体であるということは、イエス・キリストのみからだなる教会が驚異的嗣業、非常に多くの神の御業が成し遂げられるようにします。私たちが異なる肢体であることに、神を賛美しましょう。私たちをそのようにお造りになった神の御恵みと慈しみのゆえに、喜びましょう。

来月は、この信仰の量りによって分け与えることについて、より深く考えてみましょう。†

ベン・トレイ／イエス 院理事長、サンスリョンセンター本部長

信仰の通り仕えること

先月、慰労と教訓、挑戦を与える聖書の御言葉の中で、ローマ人への手紙 12 章について話しました。今月も続けて、ローマ人への手紙 12 章 6 節の御言葉を見ていきたいと思います。この 6 節は、4 節、5 節と密接な関連があります。与えられた信仰の通りに仕えること、これについてお話したいと思います。この御言葉が示している信仰とは、この世で考えるものとは異なります。

先月最後の部分で、神は私たちすべてに、量りによって信仰が分け与えられていると、また神が定められた信仰の分量は各自の賜物及び使命と関連があると話しました。私にはそれほどの信仰がないから、他の人の信仰が「より大きい、小さい」と考えがちですが、自分の信仰を他の人々に比べてはいけません。私たちにあるものは、神から与えられたものだと知ったうえで、信仰と賜物について実質的な評価をしなければなりません。そして、与えられたものに感謝し、受けた通りにそれを用いらなければならないのです。これは素晴らしい御言葉、ローマ人への手紙 12 章 6 ～ 8 節へと私たちを導いてくれます。

「このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教

える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導するものは熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。」（ローマ 12:6 ～ 8）

私はこのコラムの題を「信仰の通り仕えること」と付けました。7 節を見ると、仕えることもパウロが言及する賜物の一つです。しかし、今回私が用いる「仕える」という単語の意味は、より広い意味をもちます。ここでいう「仕える」とは、イエス・キリストのみからだなる教会に仕える、すべての働きを意味します。

この箇所は、各々異なる賜物を神の御恵みによって値なしに各自に分け与えられていると、使徒パウロは言います。これは先月学んだ 3 節の御言葉、「神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである」（ローマ 12:3）と同じ脈略です。

私たちはみんな違います。異なる賜物を持っていて、与えられた信仰の分量も違います。これらの賜物は、各自に与えられた恵みが異なるように、違います。だから使徒パウロは、与えられた恵みによって、賜物を用いて教会に仕えなさいと言っているのです。使徒パウロがここで使っている「恵み」と「信仰」を、逆に使ったほうがいいような気もします。

使徒パウロは続いて、預言する人は信仰の程度に応じて預言しなさいと言います。偽預言者は知っていること以上に、信じていること以上のものを言います。私たちがもしも、預言するように召されたなら、与えられた預言の言葉以上のものを語ってはいけません。個人的な経験や周囲の人々の経験から、私をはじめ、いかなる人が意味の分からないことを言うときがあります。それでも、聖霊が語っておられるという、内なるものに

感動があるならば、それを語らなければなりません。そういうときに、与えられた言葉だけを単純にそのまま伝えるのではなく、理解しやすくするために与えられた御言葉に付け加え装飾して語るなら、それは非常に危険です。これは預言する人のやるべきことではありません。

このような状況において、私たちが語った「不完全な」言葉こそ、他の人にとってそれがまさに必要な言葉だったりします。このような場合、その人にはその言葉の意味がわかっていることをよく見ます。しかし、解析したり他の言葉を付け加えて語るなら、むしろ混乱を招きます。使徒パウロがここで、「それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言し」――この勧めの言葉の意味がすなわち、こういうことだと思います。

お召しに従って

継いで使徒パウロは、各自の賜物は与えられた恵みによって、そして能力に応じて適切に使わなければならないと言っています。信仰が、特に預言と関連して言及されているが、ここで信仰は特別な賜物の一部分であると考えます。そして、各々の項目には、仕える人の恐れや疑いのない、確信と喜びをもってできるような信仰の量りや程度があるのです。

喜んでできるときに仕えるべきであり、他の人たちの必要を満たせる働きをしなければなりません。聖霊が与えてくださった知識と信仰によって教えられる、という確信があるときに教えなければなりません。聖霊がお与えになった深い理解――洞察力――があれば、与えられた言葉と信仰の量りによって勧めなければなりません。

しかし、そのような勧告と洞察の恵みを受けていないなら、

むしろ何の勧めもしないほうが良いでしょう。聖霊の御旨と御指示に従って勧めていないがゆえに、多くの人が深い傷を負い、つまずき倒れてしまうのです。

救済のために召されたならば、おそらく神は分け与えられるだけの資源をすでにお与えになったはずです。そういうときに、貯め込んでおかず惜しみなく快く分け与えなければなりません。指導者として召されているならば、怠けないで、また辛い選択を避けるために楽な道を探すのではなく、勤勉に、かつ熱心に指導者としての使命を果たさなければなりません。正しいことをしている、という確信と喜びがなくあわれな心がないなら、それは、神が私にではなく、他の人に与えられた賜物に違いありません。

このように、すべての賜物にはそれぞれ付随した特別な信仰の量りがあるのです。

私は、聖霊がお仰せになったいかなることに対し、信仰がないと心配しません。反対に、神から与えられた使命は必ず果たすべきであり、なおも確信をもって果たさなければならない、という信仰をもっています。私たちがこのようにしていくとき、御国のために必要なすべての働きが神の御計画通りに、――御心通りに――成し遂げられていくでしょう。私が他の人の働きをしようとすると、それは、彼らの働きを妨害し、彼らの確信を損傷させることになります。すると、その働きにおける彼らの果たすべき使命を成し遂げることができなくなるか、その働きに携わっていても、恐れと疑いをもってするようになります。と同時に、聖霊が私に与えられた使命を――任された働きを――等閑視するようになります。

そして、イエス・キリストのみからだにおいては、私が疎かにしたもの、その賜物が足りなくなります。なぜなら、私が他の人の働きに無用な、よけいなことをしているからです。また、そのみからだにおける「仕える」部分、――その人に与えられた賜物――その人がなすべき使命が用いられず、その「仕え」の部分が足りなくなります。これらにおいて、私たちがもつべき信仰、必要とされる信仰は、私たちには見えなくても、神なる聖霊が働いておられるという信仰です。（その働きに召されてないから）必要とされているようには見えなくても、結局、ふさわしい人が、適した時に、適切な方法で、その御業を成し遂げていくことを信じるのです。その働きは、その働きにふさわしい信仰の持ち主、誰かによって成し遂げられるでしょう。

それなら、私たちに委ねられた信仰を行使しましょう。そして主が聖霊を通して私たちに与えられた賜物を用いて、教会に仕えましょう。

やがて私たちはこういう質問をするようになります。「どうして私たちがやらなければならないのか？」と。使徒パウロは単純明瞭に答えます。『愛のゆえに。』

次回は愛について考えながら、ローマ人への手紙 12 章をより詳しく見てみましょう。†

愛する者よ。
あなたのたましいが
いつも恵まれていると同じく、
あなたがすべてのことに恵まれ、
またすこやかであるようにと、
わたしは祈っている。

（Ⅲヨハネ一・二）

発行：**純福音東京教会・出版部**

【翻　　訳】：諸星健児 執事、林俊秀教育生、間杉綾乃 執事、李 珍 執事、山野永理 勧士、
趙芝賢 伝道師、澤田義則 執事、金景娥 執事、朴宰完 按手執事、金澤由紀子 勧士
【日本語校正】：諸星健児 執事、松谷恵理 執事、間杉綾乃 執事、金澤由美 姉妹、吉田綾子 執事、
笠原幸子 執事、武石みどり 執事、向川 誉 執事、澤田義則 執事
【印刷・製本】：間杉典生 按手執事
【再　編　集】：金澤由紀子 勧士